

暮らしと土木を語ろう

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



最近、早稲田大学の創造理工学部で土木を専攻している学生と「土木教養講座」という対話をやり始めている。YouTubeの「オンライン国土学ワールド」とは、別にYouTubeで流す計画もあるのでその際には是非ご覧いただきたい。

その冒頭で話をしたのは、「われわれは土木を消費することで生きている」というものだった。これはもちろん、「インフラ」という言葉で語っても同じことなのだが、それを語ったのは日常生活と土木＝インフラの近さを理解してもらいたいと考えたからである。

その学生に問いかけたのは「あなたは今朝、顔を洗いましたか」という問いであった。毎朝顔を洗わない人はいないが、その時、われわれは土木を消費している。

蛇口をひねって水が出て来るのは、浄水場から道路下の水道管の敷設を行い、ダムなどの貯水池から浄水場までの導水管を整備したからであり、そして何よりもダムや貯水池を建設したからなのである。

あらためて考えると日常生活でいかに土木を使っているのかということがわかる。こうして考えると、土木＝インフラであり、インフラ＝社会の下部構造であることがよく理解できる。そして、この下部構造とは「みんなの力でみんなのために行う努力」のことであり、ほとんどが公共の施設であることも理解できるのである。

そして、十分に豊かなインフラという社会の

下部構造がしっかりとわれわれを支えていなければ、上部構造としての快適な住宅や衣食の充実した生活などという上部構造は築けないこともわかるのだ。

こうしたインフラが整備されていない発展途上国などでは、子供たちが大きなバケツで遠方から水を運んでいる様子が紹介されたりしている。一日の相当な時間と体力を大変に消耗することで、やっと生活用水を手に入れることが出来ている。

その水も消毒もされておらず、病気の感染の危険に常にさらされているのである。これを見るだけでもインフラの威力をあらためて思い知るのだ。

そして、われわれがよく認識しておきたいのは、今やインフラは「インフラコンプレックス」とでもいうべき複合体となってわれわれを支えているということである。大阪の梅田という都心の都心というべきエリアで、1980年頃にもバキュームカーが走っていたことを紹介したことがある。数戸の家に下水管路が届かなかったためである。

それは、その地域までつながることとなっていた街路がいろんな事情があって整備されておらず、そのために街路下に下水管路が埋設できなかったからであった。つまり、下水サービスは、単独で成立するものではなく道路整備を背景としているということなのである。

上水道もまったく同じことであり、家庭までつながる道路ネットワークが水道供給を可能としているのである。

われわれ全建技術者は、インフラ整備を企画し提案するサイドにいる。そのわれわれは「インフラと生活の近さを語ってきただろうか」というのが今回のテーマである。建築はその意味がわかりやすく、有名な建築家の活躍が紹介されるなどしているし、住宅にしても図書館や文化施設にしても身近な存在として多くの人にその意義が理解されている。

それに比べて土木は、有名なデザイナーなどそもそもあり得ない世界だし、日常のものなのに、住宅などと異なり土木そのものが非接触型（水道水にはさわっても、導水管にふれることはない）が多いことから意味が感じられないことがあるという事実がある。

1988年のことだが、本州四国連絡橋の児島坂出ルートが開通したとき、本州と四国が歴史上初めて結ばれた大ニュースとして全国に紹介されたが、この時あるテレビ局のアナウンサーが、「日本の建築技術の大成果であります」と述べたのだ。

当時の本州四国連絡橋公団や建設省の橋梁技術陣は、このアナウンスにガックリ来たものだった。土木と建築の区別が付いていないという不満だけではなく、なんとなく土木という表現を避けようとした感じがしたのだ。

これは筆者の最近の経験である。NHKBSプレミアムがローマ帝国時代の素晴らしさを紹介するやや長い好番組を放送した。膨大な延長の見事な水道橋や道路ネットワークの充実など、ローマ帝国の技術力の高さを紹介して、これらのインフラ技術が大帝国を支えてきたというのが番組の流れであった。

ところが、最後の場面でローマが生み出してきたものをまとめて紹介したのだが、そこでは

ローマ人の発明として「制度」「建築」などは出たものの「土木」という言葉が出てこなかったのだ。

番組では「ローマ帝国はインフラの父」とまで述べていたのに、その「インフラ整備の技術は土木である」という認識が紹介されなかったのだ。

筆者はNHKに対して「上下水道や道路の建設技術は土木と表現するのが正しい」と、この番組に対する意見を送っておいたが、その返事は来ていない。

これらのことが示すように、土木という用語が忌避されている気がして仕方がない。刷り込みに弱い日本のメディアであるから、一時の公共事業バッシングがいまだに尾を引いているのかも知れないのだが…。

そこで、われわれ全日本建設技術協会に結集するインフラ整備の企画者・技術者こそが、土木＝インフラ＝生活の維持と向上の関係について語らなければ、理解はなかなか広がらないと感じるのである。

一例を挙げると、東京で熊本のトマトを食べた人は、「九州縦貫道路から山陽自動車道、名神高速道、東名高速道、首都高速道路」を利用し、つまり消費していることになるのだが、それをどれだけの数の人が、どれだけの深さで理解できているのだろうか。

そして、こうした高速道路のネットワークが、国道や都道府県道と市町村道、都市高速道路などと一体的なネットワークを構成しているからこそ、おいしい熊本トマトを東京で食べることができるという利便を得ているのだということ。

知らないのが悪いとか、メディアが怠慢だというのは簡単だが、では、「われわれインフラ提供者は国民への周知に向けて何をしてきたのか」という問いがすぐに跳ね返ってくるのである。